

◆ 授業のねらい（シラバス【授業のテーマ及び到達目標】参照）

- ・ 10年後の未来の学校の姿を構想する
- ・ 未来の学校の姿を構想することを通して、学校の課題を捉える力とよりよい学校を創るための構想力を培う
- ・ このねらいを達成するために、PBL（「プロジェクト基盤型学習（project-based learning）」）を展開する

■ なぜPBLが求められるのか

○ 急激に変化する社会

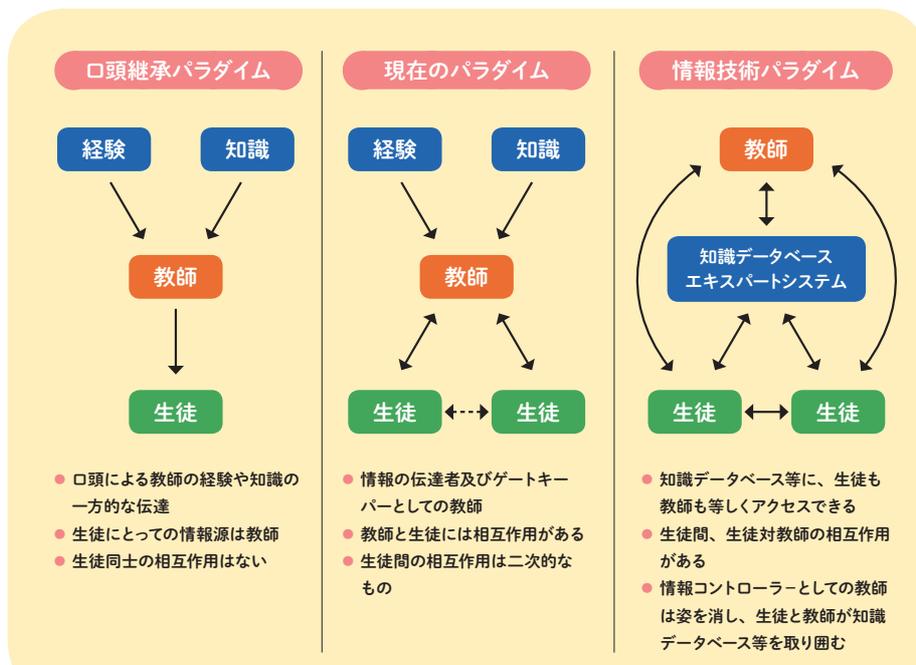
- 「『予測困難な時代』であり、新型コロナウイルス感染症により一層先行き不透明となる中、私たち一人一人、そして社会全体が、答えのない問いにどう立ち向かうのかが問われている。目の前の事象から解決すべき課題を見だし、主体的に考え、多様な立場の者が協働的に議論し、納得解を生み出すことなど、正に新学習指導要領で育成を目指す資質・能力が一層強く求められていると言えよう」（中央教育審議会, 2021）
- 「AIやICTの不断のイノベーションにより知識基盤社会が昂進し、未来が予測不能となった今日においては、この客観主義的な考え方（山中注：学びを「知識獲得の行為」「知識の転移」として捉える考え方）や制度は、機能不全に陥る。ネットワーク上で瞬時に更新され続ける膨大な情報と比較すると、個人で所有している知識は微細なものとなり、それを提供してきた学校は、そのシステム優位性が消滅の危機にある」（広石, 2018）

■ PBLとは何か

○ 基底にあるのは知識観、学習観、授業観の転換

資料1 学校教育の過去・現在・未来のモデル (Branson,1990)

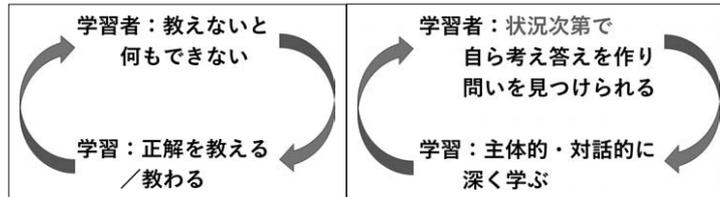
Robert K. Branson 1990 Issues in the Design of Schooling : Changing the Paradigm. Educational Technology, Vol.30, No.4, 7-10.



(奈須, 2022, p.4)

- ・ 知識とは「共同体の相互作用により常に更新され続ける暫定的合意」（広石, 2018）のこと
- ・ こうした知識観に依拠するなら、学びは「他者と共に新しい知識の構築・更新に協働的に参加すること」（広石, 2018）と定義される。参加するには、そのための活動やプロジェクトが必要になる
- ・ 実社会における本質的な問いや問題への答えを探究する過程に参加することで、人はよりよく学ぶことができる（e.g., 広石, 2018; 湯浅・大島・大島, 2011）

○ 学習観等の転換とその核心としての学習者観の転換



（白水・飯窪・齊藤・三宅, 2021, p. 28）

○ 学習者の役割, 教員の役割（e.g., 広石, 2005; 湯浅・大島・大島, 2011）

- ・ 能動的な存在として定位される学習者は、自らに責任をもち、他者と協働しながら積極的に活動に取り組むことになる
- ・ 教員は、能動的な学習者を支援するファシリテーターやコーチとして振る舞う

☆ 「アクティブ・ラーニングの昇華形」（広石, 2018）

[文献]

- 中央教育審議会 (2021). 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す, 個別最適な学びと, 協働的な学びの実現～ (答申)
- 広石英記 (2005). ワークショップの学び論—社会構成主義からみた参加型学習の持つ意義— 教育方法学研究, 31, 1-11.
- 広石英記 (2018). PBL型総合学習を核としたカリキュラム・マネジメントの展望—学びをほどき, 学びをむすぶカリキュラム・リデザイン— 日本教育学会大会研究発表要項, 77, 85-86.
- 奈須正裕 (2022). 「令和の日本型学校教育」が求めるもの T-Navi Edu, 12, 3-6.
- 白水 始・飯窪真也・齊藤萌木・三宅なほみ (編) (2021). 自治体との連携による協調学習の授業づくりプロジェクト 令和2年度活動報告書「協調が生む学びの多様性 第11集—学習科学とテクノロジーが支える新しい学びの未来—」 東京大学 高大接続研究開発センター 高大接続連携部門 CoREFユニット
- 湯浅且敏・大島 純・大島律子 (2011). PBLデザインの特徴とその効果の検討 静岡大学情報学研究, 16, 15-22.